慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・レックス（鶴木眞・桜内篤子訳）『人種問題の社会学』：John Rex, Race Relations in Sociological Theory, London: Weidenfeld and Nicolson, 1983.
Sub Title	John Rex, race relations in sociological theory
Author	関根, 政美(Sekine, Masami)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1989
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.62, No.1 (1989. 1) ,p.126- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19890128-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

ジョン・レックス（鶴木眞・桜内篤子訳）『人種問題の社会学』

John Rex, *Race Relations in Sociological Theory*, London: Weidenfeld and Nicolson, 1983.

本書は、英国を中心に活躍しているジョン・レックスによって、自らの人種理論とその立場を明らかにするために書かれたものであり、具体的な地域の人種関係を明らかにしようというものではない。社会科学のなかで、人種理論とはどのようなもので、それはどのように位置づけられるべきか検討しようとするものである。本書の原書の初版は一九六七年に出版されているが、今回翻訳され「紹介と批評」の対象としたものは、一九八三年に出版された第二版である。

本書の目次は以下のようになっている。

第二版に寄せて

第一章　理論上の問題

第二章　植民地社会における社会制度

第三章　植民地複合社会の成層と構造

第四章　植民地宗主国におけるマイノリティ

第五章　差別、搾取、抑圧そして人種差別

第六章　人種主義

第七章　人種関係研究のためのパラダイム

まず、簡単に内容を紹介することにしよう。

序章では、初版から第二版にかけての著者の議論の展開過程と、本書での重要なポイントが予め示される。と同時に誤解の基づく批判に対する反批判が試みられている。

第一章では、人種問題は社会科学の理論のなかで独自な地位を確保できるかということが問題となっている。とくにレックスが問題としているのは、機能主義的な成層論とマルクス主義階級論、およびM・G・スミスによる多元主義社会論である。というのは、これらは皆人種理論を批判的に扱っているからである。

ところで、人種関係というものは、人間の生物学的特質の違いによって特定の集団が、特定の社会的地位に割り振られることを意味する。しかし、人種によって特定の社会関係が説明できるというのでなければ、もともとこうした分野を設定する必要はない。機能主義的成層論にしろ、階級理論にしろ、またM・G・スミスの主張する多元主義論にしろ、これらは社会のなかに見られる構造的差別、あるいは社会・経済的地位の差異

を、支配者側の人々が、その支配と搾取関係を適当に理由づけ、正当化するために人種理論を利用するものであるとする。すなわち、人種主義的信念がそうした社会構造を決定するものではないと考える（二六頁）。

もしそうであるとすれば、そもそも人種関係の社会学はあまり意味がない。そこで、レックスは次のようにいう。「社会学の研究対象となるいろいろな社会的状況や過程のうち、どれが人種関係という社会学の一分野に属するかを見極めるのが先決だ。もっとも、はたしてそのような特定の状況や構造や過程、そしてそのような分野が実在するのかと疑う根拠がなくもない。しかし、もし他の現象（たとえば階級）とは性質をはっきり異にする一連の社会的現象があることを示すことができれば、われわれの主張を立証できたことになる」（二五―六頁）。要するに、「ある人物と、社会における地位は、膚の色を地位に結びつける参加者の論理にしたがって決められる」（二七頁）という事態を指摘することが必要なのである。

レックスは、基本的には階級理論の重要性を認め、自らの人種理論研究も階級分析に多くを依存していることを認めながらも、すべての不平等を経済形態に還元してしまう立場を嫌うとともに、労働者階級でも人種的、民族的に違う人々は容易に団結できないという経験的事実を重視し、そこになんらかの説明要因が必要であると考える（二九頁）。この点で多元的なウェーバーの階級論に接近するが、人種的要因を軽視したウェーバーを批判することになる。

また、成層論に対しては、すべての人々の地位の序列化のためには、社会の構成員がすべて共通の価値観、すなわち、評価の基準を持っていることが前提とされるが、人種関係にはそのようなものが期待できないとする。パーソンズでさえ民族性を、成層の全般的なパターンのなかでの例外として扱っているではないかと指摘する（三六頁）。スミスの多元主義論では、人種関係と見られるものも、政治的、社会的、経済的、文化的要因などさまざまな面から考えなくてはいけないというが、レックスはともかくも人種論によって社会関係が規定される状況があることに固執する（四二頁）。

レックスは、そこで人種関係をめぐる社会学の分野を見極める上で重要な三つの要素を以下のように示す（五二頁）。

（一）集団の間で見られるような分化、不平等、多元性の状況

（二）そのような集団を、外見、文化そしてときにはその先祖だけではっきり区別しうること

（三）明白な、あるいは暗黙の論理（それは生物学的な論理であることが多い）による差別の説明あるいは正当化

このような時、人種関係というものがあるとレックスは考えるが、それは具体的には支配集団とマイノリティの関係ということになる。とくに、支配集団から見た場合は以下の通りとなる（四八―九頁）。

一　同化
　(a)強制された同化
　(b)容認された同化
二　多元主義
三　マイノリティの法的保護
四　人間集団の移動
　(a)平和的移動
　(b)強制的移動
五　従属関係の継続
六　殲滅

マイノリティと考えられる集団としては、(一)被征服者、(二)権利を剝奪された奴隷、(三)貧しい移民、(四)政治的難民、(五)契約労働者、(六)商業に従事するマイノリティをあげているが（五〇頁）、第一章では人種関係の存在とその社会学の可能性とともに、具体的に支配者とマイノリティとの関係状況について論じられる。

第二章は、人種関係が生じるのは、まずなによりも人種的に異なる社会集団が出会うところであるから、植民地での人種関係が問題となる。レックスは、異人種の接触が行われているところをフロンティアと呼び、どちらか一方の集団が征服などによって社会に編入されるとフロンティアは消失するという。そこで、問題とすべきは、なによりもこうした社会では、社会の構成員の間に統合的価値が存在しないということである（五五頁）。その結果、「社会組織の中に各集団を結びつける規範的な秩序がない限り、服従は政治的・経済的要素によらざるをえないと考える。言いかえれば、強制されるか、あるいは経済的利益につながって初めて服従がありうるのである」（五五頁）。

こうした形で被征服集団が編入されると、そこには「階級の区別よりもっと根本的な区別がある。そして非征服者が特殊な肉体的特徴や特殊な文化的習慣など、目に見える違いをもっているならば、他の集団への移動の可能性はなくなる」（五九頁）のである。このような社会関係は、基本的に高度に発達した資本主義社会とは異なり、マックス・ウェーバーのいう「冒険的、略奪的資本主義」の世界である。それ故に、資本主義市場の法則に依拠する階級分析も、また統合的価値の存在を前提とする成層論も、あまり役に立たない。そこは、人種観念を基礎とした強制的統合あるいは支配の世界なのである。

レックスはこうした植民地世界の仕組みをエステート・システムとして類型化する（六一頁）。具体的には、スペイン領アメリカのエンコミエンダ、レパーティエミエント、南アフリカのパス制度、北米の奴隷制度などについて言及する。しかし、形態上の違いはともかくも異人種が接触し、その結果一方が征服され、強制的統合、支配の下に置かれたとき人種関係が生まれる。こうして編入された人々は、レックスによれば「外的プロレタリアート」となる。また、こうした植民地での支配従属関係は、植民地宗主国においても再生産される（七八頁）。

第三章では、統合的規範、価値によって統一されておらず、異なる人種が強制によって支配されている植民地社会の人種集団の関係について扱われる。ここでもレックスは成層という概念を考察し、伝統的成層概念では人種関係を分析できないことを明らかにする。本章の前半では、主として機能主義的な成層論の限界を論じることにスペースを費やしている。これは、機能主義的な成層論が、市場機能を中心とした社会の統合状況および、人々の職業、威信の評価上のコンセンサスを前提としているが、それは、人種的に異なり、既に明らかにされたような強制的支配関係を土台とするような植民地社会の分析に、あまり役立たないことを明らかにしたいからである。

つまりレックスが論じたいことは、植民地社会が複合社会であり、社会的にも基本的に不安定であるということである（一一七頁）。すなわち、白人による第一次植民者に次いで、一般的には白人植民者の補助的な役割を行う有色人（インド人、中国人など）が、第二次植民者として流入してくるが（一〇五頁）、こうした移民の形態は人種構成を複雑にしている。それ故に、階級分析が想定する人種の垣根を越えた労働者の連帯を不可能とし、階級闘争は民族闘争の形をとる。むしろ、植民地は第一次植民者の強制的支配の下に辛うじて安定を保っているにすぎない。そのために、「このような社会は、植民地支配勢力が撤退すると不安定な状況におかれる」（一〇六頁）。独立後、人種的な政治闘争が新興諸国に多いのはこのせいである。

ところで、植民地社会においては強制的な統合力による秩序が辛うじて守られているが、これをさらに強固なものとして正当化するために、人種主義が用いられる。要するに、異人種間の人々の征服によってできあがった植民地においては、必然的に人種的基準に基づいた複合社会ができ、そこには強制的サンクションと、人種イデオロギーが発展するのである。もっとも、強制的サンクションばかりでは不十分なので、時には被支配者に対する脱文化化の努力も行い、その適応程度によって処遇を変えるということもあった。奇妙にも原住民の生活を守ることを目的とした宣教師などによるミッション活動による布教、教育が、その目的に大いに役立ったのである（一〇九頁）。

第四章では、議論は植民地社会から植民地宗主国へと大きく展開する。

一般に、植民地は差別、不平等をともなう人種的複合性、強制サンクション、人種イデオロギーによって特色づけられるが、近代社会である植民地宗主国では、文化的統一、価値的コンセンサス、規範的サンクションによって特徴づけられる。そこには、不安定な植民地、安定的で近代的な宗主国といった対照が強調されている。しかし、レックスは植民地宗主国にあっても、「人種関係問題を引き起こすような構造的・イデオロギー的特徴が発達する可能性があるのかどうか」の考察が必要だとする（一二〇―一頁）。レックスは、当然のことながら植民地社会と同じ複合性が見いだせるとする。そこで、ここでも第三章と同じ

ように、価値的統合性を前提とする機能主義的成層論では、この点を十分明らかにできないとして、やはり本章の前半部分をその批判に費やしている。

結局、宗主国の価値的統合といっても、その価値は支配階級の価値であり、それがたまたま階級闘争の休戦状況のなかで一時的に受け入れられているにすぎないとレックスはいう（一二七頁）。ただ、それを機能主義者達は永続的なものと見なそうとしているにすぎないのである。しかし、宗主国の一般労働者達は、階級闘争の休戦状況のなかでは職業構造、コミュニティ構造、教育と権力のイメージを開放的、昇進可能なものと理解するので、社会はすぐれて安定的になる（一三〇頁）。しかし、これはマイノリティといわれる人々にあてはまるであろうか。

経験的な調査から、レックスはマイノリティは十分社会に受け入れられていないと結論する。そして、「宗主国の市民が描く植民地からの移民イメージの中で、どの要素が宗主国の成層構造における移民の位置づけにもっとも大きく作用するかである。われわれがみてもっとも影響が大きいと思われるのは、植民地出身の労働者の暗黙の政治的・経済的地位、そして文化的進化の程度、さらには膚の色を初めとする肉体的特性である」（一四〇頁）。要するに、彼らは「野蛮人」であり「テロリスト」であり、宗主国の労働者階級からも遠ざけられる。「したがって、支配階級の価値体系からも、宗主国の労働者階級の対抗価値体系からも、そして休戦の価値体系からも、植民地出身の人間は正常な社会の成層には組み込まれない地位の部外者なのである。彼らは成層体系の最底辺よりさらに下におり、彼らが成層に組み込まれるためには彼らの地位が変わるか、それとも体系を拡大し複雑にして彼らの地位をも組み込むようにするかである」（一四一頁）。

植民地からの労働者は、「補充労働者」（一四三頁）として扱われ、彼らの子孫も成層体系に受け入れられない部外者となりやすい。さらに、スケープゴートとして扱われ、失業、劣悪な住宅状況も彼ら有色人移民のせいにされやすい。こうした形での欲求不満の解消により、「憤りを外集団（よそ者）にむけさせることによって脱政治段階にある社会秩序の団結が保たれるのである」（一四四頁）。こうしたことから、レックスは、移民労働者達が永久にマイノリティとなり、逆に「永久的に過激な自己防衛の態度を見に付け」、その結果、「宗主国社会が未編入の植民地出身マイノリティを抱え込みながら存続できるかどうかも問う必要がある」（一五〇頁）と、深刻な問いかけをする。

第五章、第六章では、第五章の最後の深刻な問いかけを受け、社会における人種関係の状況を検討することの必要性が強調される。今までは、植民地社会および宗主国において人種関係が発生する制度的、構造的条件について論じられてきた。しかし、①具体的に特定の集団が人種的基準によって特定の扱いを受け、そして、②その状況を定義し、正当化する特定の理論の発展がなければ、人種関係状況とはいえないという立場から論じ始め

る（一五一頁）。前者について第五章で、後者について第六章で論じる。

第五章では、人種関係状況とは、生得的な役割配分が特定集団の経済・社会的地位を決定するという状況があり、そこにまずなんらかの対立が生じていなくてはならないという。レックスは、人種関係として問題となるのは、成層や構成部分の間に高度な対立が存在し、それが人種理論に根拠を有する場合で、なおかつ以下のような対立が考えられるとする（一五五頁）。

（一）マイノリティ集団が下から成層体系に入ろうとするときに生じる対立

（二）限られた資源をめぐって二つ以上の集団が競合するときに起きる対立

（三）他の集団に対して抑圧的政策（punitive policies）をとるときの状況

（四）他の集団の労働力を組織的に搾取しようとするときの状況

（五）内戦に近い状況

こうした対立を避けるために、受け入れ社会は様々な対策をとる。これについては既に第一章で扱っているが、ここでは「従属関係の持続」、すなわちマイノリティが同化したくとも受け入れ社会が許してくれないことを問題視して論述を進める。そして、人種集団間の対立は、成層論、多元的社会論、知識社会学、思想史のみで解決できるものではないとして、人種関係の社会学の必要性を再度強調する。

第六章では、人種主義理論の発生のメカニズムが論じられる。パレートの「残基」および「派生体」の概念を利用して、人間は人間の非論理的行動を合理的に解釈し、自分の行動をなんとか知的に正当化しようとするものだ（一七一頁）、という前提で議論を開始する。いずれにしろ、意識的あるいは無意識的に行う人種的基準に基づいた行動（感情、政策、評価、信念）を、初めは場当たり的に適当に説明して済ます。これは一般大衆の場合それで十分であるが、より一貫性の高い包括的な思想体系の中に位置づけられていくものである（一八八頁）。こうして、遺伝的特徴と結び付けられた人種理論は、確固たるものになっていくのである。

以上、第一章から第六章までの議論をしてきたが、ともかくも人種関係が発生する社会状況（第二、三、四章）、そして発生した後の社会状況（第五章）と、人種関係状況を正当化する人種理論の体系化（第六章）が論じられてきた。ところで最後の第七章である。ここでレックスは、今まで植民地社会における人種関係状況と植民地宗主国の人種関係状況を、個々別々に見てきた形になっているが、実はこの二つの状況は別々のものではなく、イマヌエル・ウォーラースタインが発展させた世界システム論が明らかにしたように、単一の資本主義体系の下に見られる二つの異なる生産制度として把握できるものだという（二〇六頁）。つまり、かつての植民地社会の人種関係は、一方で先進諸国に

よる支配搾取（新植民地主義）という形で持続している傾向があるとともに、他方で、植民地宗主国内における旧植民地からの移民労働者の支配搾取問題として出現しているのであり、それはまさに英国の植民地関係を考えてみると、「四〇〇年以上にわたる大英帝国」問題なのである。

そして、現在の旧植民地宗主国では、白人中心の「先進的資本主義」に基づく労働市場での搾取と、そこから排除されている有色人中心の「周辺的資本主義」（ウェーバーのいう略奪的資本主義）での搾取という二重構造の存在を強調する。後者は、まさに人種関係に基づいた強制的サンクションが働くところである。この結果、第四章で扱ったような状況が宗主国に現出するのである。レックスはこうした観点から、人種関係研究のためのパラダイムを提出する。それにより、植民地社会が植民地化される以前から、独立して脱植民地化の過程を歩むなかに存在する、歴史的な人種関係の変遷を見ることが可能となると同時に、他方で旧植民地からの移民労働者を受け入れた宗主国での人種関係も理解できる。少なくとも、植民地での人種関係が宗主国での関係を規定するとすれば当然であろう。レックスのパラダイムでは以下の変数が考慮される。

「構成的変数」としては、一、植民地化以前の社会形態、二、植民地詐取の基本形態、三、社会成層関係、また、「過程的変数」としては、一、経済の自由化、二、政治的独立、三、世界体系への編入、四、階級闘争および革命の内部過程があげられている。個々の変数についてここでは詳しく説明できないが、構成的変数の一、二、三および過程的変数の一、二については既に第二章、第三章で説明されている。残りのものは、世界システムでの位置付けと、内部での階級運動であるが、後者については人種的な階級形成が一般的なので、先進国の階級分析をそのまま応用することはできないとする（二二八頁）。なお、宗主国の分析においては、有色人労働者が「階級外階級」(under-class) として改めて捉えられている（二三八頁）。

さて、長々とさほど分厚いものではない本書の粗筋を追ってきた。レックスはこの本で、人種問題は階級問題、あるいは成層分析に還元できるものではなく、階級分析に立つレックスとしても、人種意識を虚偽意識、あるいは単なる搾取の正当化の道具と見なすことはできず、階級分析の緻密化のためにも独自に研究すべき対象であると主張した（多元的階級論）。そして、人種（に基づく階級）関係がどのような条件で発生し、それを人種関係と呼ぶための条件とは何か考えようとしたのである。そして、基本的に異人種間の接触によってそれは引き起こされ、対立関係が生じた時に存在が認められるものであるから、どうしても植民地時代からの分析が必要になる。

そうであるならば、植民地および宗主国の異人種間の階級関係は、先進国の資本主義関係分析を土台に発展してきた階級分析では不十分だということになる。やはり、経済的利害だけで

はなく、人種意識という非合理的な要素の分析が重要となる。そこから、階級分析に立脚しながらも、それを補足するような人種関係の社会学を提唱するのである。

評者としては、階級分析、成層分析の不十分さを補い、人種関係の社会学の存在を強調するレックスを好ましく思う。とくに、非歴史的になりやすい成層分析に対し、歴史的視点、とくに第二版で強調された世界システム論的な視点の強調はもっともなことだと思う。また、人種意識を単純な虚偽意識として退け、安易に労働者の団結を説く階級論者に待ったをかけたことも理解できる。さらに、最近では人種関係よりは、エスニック関係を強調する風潮が強くなるなかで、人種関係の特殊性に固執する点も納得がいく。そして、人種関係の発生が、強制的サンクションをともなう略奪的資本主義に支配された植民地の社会構造に起因しているとして、人種関係の発生を人種意識、偏見といった非合理的な心理的要因にのみ帰そうとする心理主義的な議論を批判するが、それも賛成できる。レックスは構造的要因についても十分な注意を払っている。とはいえ、社会科学理論の合理主義的偏向についても批判を向け、人種意識の非合理性も無視しない。階級論に立つ人によって書かれたものとしては、大変バランスのとれたものに思える。

しかし、問題は人種関係の独自性が主張されたとしても、それがいつも資本主義とのみ結び付けられなければならないのかということである。この場合、略奪的資本主義のことをいうが、これも資本主義に違いない。レックスは近代的資本主義にすべての植民地が編入されれば、人種関係に基づく搾取関係はなくなる。そして残るのは、市場関係による搾取関係のみになり、そうなれば従来の階級分析が生きてくると考えているようである。結局、近代的資本主義を土台とする世界システムのなかに、前近代的資本主義植民地がどう編入されていくかが問題となる。宗主国では、これらが二重構造を形づくることになり、後者がどう変要していくかが焦点となる。

確かに、レックスは人種主義的なイデオロギーは「独自な生命を持ち始め、集団の境界線を規定し、階級内および階級とは関係ない集団間の紛争を助長する」（二四〇頁）こともあるとして、人種関係の解決に対し悲観的である。とはいえ、資本主義と人種関係との関連に固執する点で階級論者の範疇にレックスが入ることは間違いない。評者はもっと広い意味での人種関係の発生と存在を考える必要があると思う。それは、常に資本主義的な関係のなかにのみ見られるのではないかと思うからである。そうでないとすれば、最近の社会主義諸国における人種問題、民族問題が説明できない。現在の社会主義の人種問題は、すべてかつて資本主義時代の名残なのか。こうした点は、本書を読んでいてずっと疑問に思った。

また、人種問題は、対立、差別、競争などが存在するときのみ発生するものとして、レックスは同化、多元主義的解決が生じる過程に全く興味を示していないが、評者から見ると、そう

した過程こそが重要なものに思える。好ましい人種関係などあり得ないとして（一五九頁）、初めから、人種関係を否定的なものに限定しているのは、議論を狭くしているのではないかと思う。資本主義社会では解決はないと考えているのならば別であるが、そうでもないとすれば、本書が否定的な人種問題の発生にのみこだわっているのはちと合点がいかない。解決法の提示は本書の目的でないと言明しているが（一九八頁）、本書から希望の光が見えてこないのはそのせいであろう。

こうした問題が、評者には感じとられた。それにしても人種問題を歴史的、構造的な側面から論じ、なおかつ人種意識の非合理性とも議論を結び付けたことは高く評価できる。とはいえ、レックスの議論は、宗主国英国の白人エスニック集団関係分析に国内植民地（中核―周辺）論を応用し、文化的分業論を提唱したヘクターらの議論とよく似ているようである。本書では、同化あるいは多元主義的解決を見いだしやすいエスニック集団関係には、全く興味を示していないようであるが、エスニック問題を中心に扱ったヘクターの議論について、レックスの意見を聞いてみたい。筆者はかつて、人種・エスニック集団関係理論の整理を行ったことがあるが（本誌一九八七年一月号参照）、その時点では、レックスの議論をどう位置づけるべきか検討しなかったが、今後検討の対象としたい。

さて、オーストラリアの多文化社会研究に首を突っ込み、移民・難民問題や人種・エスニック問題に興味を持ったお陰で、本書の書評を書く羽目になった。日本では伝統的に差別問題を扱う人は多くても、人種・エスニック集団関係の理論を深く検討し、人種差別、人種主義の発生原因、結果そしてその解決に関して体系だった理論的研究を行っている人は少ないように思われる。問題意識と批判のみが先行しているようだ。近年、日本でもこうした問題にじっくりと取り組む社会学者が増えてき始めたと思われるが、そうした傾向をさらに刺激するという意味で、本書の出版はタイムリーであると思う。翻訳も難解な内容をよくこなしたうえに、大変読みやすくなっているので、できるだけ多くの人々に読んでもらいたい。

（三嶺書房、一九八七年、本文二五六頁）

関根　政美